

心理学者のダニエル・カーネマン (Daniel Kahneman 1934-) が、2002年にノーベル経済学賞を取った。ノーベル経済学賞は「見えざる手」の有効性を数学的に証明しようとする新古典派の経済学者に受賞者が偏っているから廃止せよと言う声があがっている。カーネマンの受賞はそういう批判を跳ね返すという政治的な思惑があるのかもしれない。彼の理論は、「見えざる手」の存在を否定してしまう。そこから経済学に新しい「新古典派」の自由主義とは違う動きがでてきている。そこで問題になるのが「リバタリアン・パターナリズム」という言葉である。

「リバタリアン」(libertarian)という言葉は「リベラル」(liberal)という言葉にももの足りないという感情を持つ人々が新しく作った言葉である。「リバタリアニズム」(libertarianism)は「完全自由主義」と訳される。それは社会福祉政策を止めて自由放任に徹底するなら、経済成長が達成されると主張する。「社会福祉政策を受け入れてしまうリベラリズムではダメだ」と思っている。

「自由とはパターナリズムの否定である」というアイザイア・バーリンの立場は、「リバタリアン」に近い。それなら「「リバタリアン・パターナリズム」という概念は、「木製の鉄」、「丸い四角」と同じで、自己矛盾を含んでしまうだろう。(加藤尚武「選択の自由は必要か——著書紹介 Sarah Conly :Against Autonomy2013」を参照)

「リバタリアン・パターナリズム」という言葉が、登場したのは、リチャード・セイラー (Richard Thaler)、キャス・サンステーン (Cass R. Sunstein)「実践行動経済学」(原題 Nudge-Improving Decisions about Health, Wealth, and Happiness 2008)においてである。それは「ナッジ」(nudge 注意をひくためにひじでそっと突く)を術語化したものと言えるだろう。

「リバタリアン・パターナリズムは相対的に弱く、ソフトで、押しつけ的ではない形のパターナリズムである。選択の自由が妨げられているわけでも、選択肢が制限されているわけでも、選択が大きな負担になるわけでもない。タバコを吸いたいとか、キャンディーをたくさん食べたいとか、続けられないような医療保険プランを選びたいとか、老後の資金を貯められなくてもかまわないとかいう人がいても、リバタリアン・パターナリストはそうしないように強制することはないし、そうしづらくすることさえしない。それでもわれわれが勧めるアプローチはパターナリズムの一種とみなされる。民間部門や公的部門の選択アーキテクトは、ただ単に人々がどのような選択をするかを突きとめたり、予測される選択を実行させようとしたりしようとしているのではない。人々をより良い生活が送れる方向に進ませるように自覚的に取り組んでいるのである。選択アーキテクトはナッジしているのだ。われわれの言うナッジは、選択を禁じることも、経済的なインセンティブを大きく変えることもなく、人々の行動を予測可能な形で変える選択アーキテクトのあらゆる要素を意味する。」(リチャード・セイラー、キャス・サンステーン「実践行動経済学」遠藤真美訳 日経 BP2009年 17頁)

この本が話題になったのは、アメリカで投機バブルの破綻の被害者となった人の行動を改善するという目的が適切だと多くの人が考えるようになったからである。単に「自由な選択がいい」というのでは不十分で、適切な指導が必要だという考え方が有力になって来た。

この書物の目玉は投資法の改善なのだが、「臓器提供者を増やす方法」という章もある。「われわれのリバタリアン基準に合格できる政策は、「推定同意」と呼ばれるものである。推定同意は選択の自由を守るが、デフォルト・ルールが変わるため、明示的同意とは異なる。推定同意方式ではすべての市民は臓器提供に同意しているものとみなされるが、臓器提供に対する不同意の意思表示をする機会が与えられ、その意思表示を簡単に行うことができる。」（同 275 頁）

この引用文で「デフォルト・ルール」という言葉が出てくるが、田中英夫編「英米法辞典」（東京大学出版会）にも、築田長世編「ビジネス英和辞典」（研究社）にも記載がない。Wikipediaには、次の記載がある。「契約、信任、遺言あるいは他の法律的に有効な同意によらないでは変更不可能な法律の規則」（a rule of law that can be overridden by a contract, trust, will, or other legally effective agreement.）という説明がでている。「強制的規則」（mandatory rules）の反意語とされている。

この「リバタリアン・パターナリズム」という概念が、ダニエル・カーネマン「ファスト&スロー」（村井章子訳、早川書房 2012 年）に引用されている。

「リバタリアン・パターナリズムでは、市民が自分たちの長期的利益に資する意思決定ができるよう、国をはじめとする行政機関や制度が市民をナッジすることを認める。ナッジとは、そっと押すとか、促す、誘導する、といった意味合いである。年金制度への加入をデフォルトの選択肢にしておくことなどは、ナッジの一例である。チェック欄にマークを入れるだけで簡単に非加入を選べる場合、自動加入方式が個人の自由を侵害するとは主張できまい。すでに述べたように、個人の選択肢をフレーミング（セイラーとサンステューンが選択アーキテクチャと呼ぶ）することによって、結果には大きなちがいが出てくる。ナッジは健全な心理学に基づいており、デフォルトの選択肢は標準としてすんなり受け入れられるように設計される。標準から外れた選択をするのは、自らの強い意思を示す行為であり、熟考を必要とし、より多くの責任を伴い、何かことがあった場合には、デフォルトのままにしておいたときより強く後悔することになる。」（ダニエル・カーネマン「ファスト&スロー」（村井章子訳、早川書房 2012 年下 266 頁）

ここでは年金制度は、個人の側から特別な「加入しません」（不履行＝デフォルト）という意思表示をしない限り、加入したと見なされる。この制度変換が、アメリカ社会の根本的な体質変換に結びつく可能性はある。リバタリアニズムの角をとって、リベラルに近づけることになるだろう。医療保険の強制加入反対、累進課税反対、銃規制反対等々のウルトラ・自由主義がもっと理性的な自由主義に体質変換するとしたら、この「リバタリアン・パターナリズム」という概念をキーワードとすることになるかもしれない。

カーネマン「ファスト&スロー」の概要を説明しておこう。人間の思考を「システム1：早い思考」と「システム2：遅い思考」に分ける。この分け方は、直観と分別と言ってもいい。即座に判断を下す直感的な思考と、論理を組み立てたり、計算したり、証拠となるデータをとったりする悟性的思考という二分法だとみてもいい。

この分類枠のなかにカーネマンは、最近の実験心理学、統計学、確率計算などの成果を読みとって、それらの成果を二つのタイプの思考として説明する。その読み取りが、専門的に見ると非常に高度なもので、認識の現代的な方法のすぐれたものを網羅している。

そこから分かるのは、直観なしには何もできないが、直観の早とちりを悟性の吟味にかけるとさまざまの誤謬の型が見えて来るということである。

たとえば投資の専門家が実績を上げていると信じているが、それが本当かと疑う。投資の専門家が実績を挙げているように見えるのは、「プロには素人とはちがうノウハウがある」という迷信が働いているからで、実績を調査すると、専門家としての実績が見られないというような調査を参照する。その実例は、実に良く選ばれているので、ニューヨーク・タイムスなどの年間ベストブックに選ばれたというのも当然だと思う。そして「人間は過ちやすい。だから、パターンリズムが必要だ」という帰結になっている。ここにはアメリカの思想の重要な転換点がひそんでいるかもしれない。（2013年1月28日）